

やまざき文化

'82-2 * No.1



山崎町文化連盟編集発行



文化連盟機関誌「やまさき文化」の発刊を祝して

山崎町文化連盟会長◆庄静夫◆

待望久しかつた山崎町文化連盟の機関誌が「やまさき文化」と名のつて、いよいよ発刊の日を迎えたことはまさに欣快の極みであります。

機関誌の発刊は連盟を構成する十九の諸団体間の相互理解と協力関係を一層堅固にすることが究極の目的であります。

山崎町が更に文化の香り高い町へと発展するために貢献するであろうことを確信して疑ひませんが、更に「やまさき文化」が一步を進めて、文化連盟の機関誌であると同時に、その名通り山崎町における諸文芸、例えは詩歌、俳句、小説、戯曲、随筆、論説、評論等々の創作発表の広場として、広く山崎町民全体

の文化誌として活用せられ育成せられて文字通り山崎文化の花が美しく開花する日の来る事を心から念願し期待するものであります。

この機関誌が誕生するまでに実は数年に亘る陣痛の年月がありました。その間に現実の諸条件と将来への展望の分析と検討を重ねてこられた副会長はじめ関係各役員諸氏の一方ならぬ御苦労に対しても心より感謝する次第であります。

文化連盟機関誌「やまさき文化」の発刊を祝して

庄
静夫

伊藤親保

やまさき文化の発刊を喜ぶ

福山清一

藤井慧乘

秋の芸能祭によせて

安井道夫

山中陽一

手造りのオーケストラ公演

荒木俊介

浅田耕三

・袍の紐

根岸元彦

・鳥葬のことなど

①

・文学再入門の記

②

・郷土の歴史と文化について

③

・各部雑感◆◆

④

山崎町俳句大会開かる

和田疎人

⑤

郷土芸能を通じて又、その活動

塙本重郎兵衛

⑥

短歌

藤村省三

⑦

尺八と私

福山司城

⑧

稽古と作意

庄 和夫

⑨

やまさき文化の発刊に寄せて

前野四郎

⑩

やまさき文化の発刊に寄せて

金井信治

⑪

新潮会の歩み

取越三郎

⑫

謡の略解

池田大典

⑬

茶の心をたどりて

神山宗明

⑭

山崎闇齋先生三百祭について

前野四郎

⑮

打ち込め雛鳥

高野圭介

⑯

秋の音楽祭

尾崎正明

⑰

美術協会を創られた人々

小川 登

⑱

漢詩と日本精神

小川賀尉

⑲

表紙

根岸元彦

⑳

やまさき文化

82/2

目 次

やまさき文化の発刊を喜ぶ

山崎町文化連盟副会長
伊藤親保

私は郡美術協会長として、毎年神戸そ
ごうの県民ギャラリーで、「播磨のふる
里 宮栗展」を開催し、その作品を西播文
化会館で展覧、更に郡内各町で持廻り展
覧会を開いている。又西播文化団体連絡
協議会の事務局長として、西播文化会館
を中心に、西播ふる里写真展・コートラス
大会・西播県民短歌祭・俳句祭・西播史
跡探訪バスツアー等、西播全域の文化の
交流は勿論、西播文化財の保存の呼び掛け
や、西播祭を中心に伝統芸能の発表の場
造り等、西播磨の広域生活圏の文化の連
帶を計るべく努めている。

西播磨は揖保川水系を中心に、市川、
千種川と三つの水系文化が、姫路を中心
に西播磨文化圏として、人口約八十五万
の一国形態をしている。

そこに揖保川の上、中流文化圏の中心
地として、昔から播磨の西北隅の交通や
経済の要衝としての、山崎藩や山崎商圏
と共に、一つの文化圏を作り、伝統の深
さを持った、我が文化町山崎を自負して
いる。

然し畿内の田舎の播磨の国!! その避
辺の山の宮栗!! それは本地師や鉄山

師や落人等流人の里であり、その中心の
山崎町も過疎と孤独の文化的傾向と、お
山の大将的甘さや脆さを持つていいのか。
戦後昭和二四年山崎美術同好会を創り、
近年文化連盟が作られ、美術は竜野市と
肩を並べお互の交流と切磋に依り、その
成果は県下でも知られている。

然し根岸先生、浅田先生等の優秀な文
学作家を持ちながら、発表の場造りが出
来なかつたことが、私の久しい悔の一つ
であつた。この度「やまさき文化」の發
刊により、文学的な古い郷土の掘りおこ
しや、未来への希望の郷土の語らいの場
の出来たことを喜んでいる。

終りに西播磨の文化圏を文化の一国造
りと想え、文化系大学を姫路市に!! 県
立図書館を宍粟郡民会館の建設に併置の、
一大運動に立上りたい。

秋の催しとしては山崎地方の秋まつり
を中心にして、文化連盟の加入団体が主
催または共催する、美術展 墓・将棋大
会、詩吟大会や茶会、生花展、短歌大会、
俳句大会、菊花展と盛り沢山の行事の連
続であります。

第三回秋の芸能祭は、昭和五十六年十



第3回 秋の芸能祭によせて

山崎町文化連盟事務局長

福山 清一

一月二十二日午前九時半から下村記念館
において、山崎謡曲同好会、山崎詩舞道
連盟、邦楽・邦舞研究会、郷土芸能保存
会の方々の出演により、華やかに開幕さ
れました。

謡曲同好会の蟬丸、仕舞山姥（キリ）
の莊重さ、詩舞道連盟賛下の各流派各師
の連吟、独吟による各派のそれぞれ独特
の吟詠ぶり、当地方で初めて公の場で唄
われた小唄研究会の方々の立場をたてて
の熱演、可憐な幼女が一生懸命に舞い、
老練な方々の舞踊で、その粹を表現され
た日本舞踊、箏、三弦、尺八の合奏によ
る日本伝統の古典芸術の妙を披露された
各邦楽研究会員の技巧の老練さ、地方に
伝承されてきた民俗芸能の情緒豊かで、
華麗な獅子舞等、多数の観客を桃源境に
誘いこんだ楽しく有意義な芸能祭であつ
たと悦んでおります。

秋の芸能祭は例年文化連盟主催で行う
こととしており、今後も各団体が技術向
上に研鑽され、山崎町文化向上に一段
と寄与されることを切望いたします。

手作りのオーケストラ公演

日本ファイル播州四公演 実行委員会委員長 藤井慧乘



実行委員会特別公演 実行委員会委員長 藤井慧乘

宏栗でフルメンバーの一流オーケストラを迎えよう。この相談を受けた私の実感は、それは無理だろうと思った。会場は、聴衆は、経費は、可能にする何もない。然し、だからこそやらないければいけないのではないだろうかと恐る恐る下調べから始める。可能性のない情報ばかり集まつてくる。何度も逃げ出そうと考えて見た。

然しその当日千五百名の聴衆を集め、

演奏が始まる。バイオリンの音がさざ波の様に流れていく。如何にすばらしいステレオでもこの生演奏には及ばない。ドラムが、コントラバスの響きが会場をゆるがせる。中学生は身を乗り出し、小学生は眼をいっぱい開き、老婦人は眼を閉じて静かに聴いている。主催責任の私はクールにならねばと思う程、胸があつくなる。

この思ひぬ大成功の理由の一つに会場がある。オーケストラの会場と言えば、高いステージ、重い緞帳、音響効果の良い深々としたシート。この会場は、低い酒箱をつみ上げたステージ、オーケストラと平行する形の横長の席、体育館のスレート天井である。町の物知りが「それでは騒音はあっても音楽にはならないだろ」と言つたものである。然しこれが良かった。悪条件のすべてが聴衆を音の中につみこむ効果となつて、耳で聴くより体で感じることが出来、オケメンバードの親密感がわいて来た。予想しなかつた意外な効果はこれから会館作りにおいても考えさせられる事であった。

成功の第二は、千五百名を集めること

が出来た組織作りと、この会を盛り上げてくれた裏方の若い人達の力である。文化活動は一見華やかに見えるものである。然しその裏で見えない汗の量が成功的量に比例する。

日本ファイルの公演は播州で四会場開かれだが、一番やつてよかつた会場は山崎会場であつたと思つ次第である。

新能

副会長 山中陽一

能樂の源流は、中国から渡來した雜戯、散樂が民間に浸透して猿樂となり、鎌倉時代末期に現在の能に近い劇芸能となつたと言われる。勿論、能樂の完成は觀阿弥、世阿弥という二代に亘る天才の出現がなくては叶わぬことであった。足利義満の保護によつて隆盛となつた能樂はその後武士の愛好するところとなり、江戸時代に幕府が武家の式樂と定めてからは庶民と離れて幽玄の伝統を維持し続けた。

一方狂言は同じ猿樂の語りに滑稽味を強調し、又、能に附随する物語りの進行役として共演してきた。

薪能は元来興福寺の芝の上で毎年二月に七日間催される神事能であったが、

これにならつて平安神宮、明治神宮など全国の有名神社、名城などで奉納されるようになつた。

山崎八幡神社の能樂殿は元禄時代の建立と伝えられ、大正末期までは旧本多家ゆかりの人達によつて謡曲の奉納が行われていたと言われる。山麓の鬱蒼たる森に囲まれた境内に聳える能樂殿、鏡板の松も色褪せて篝火に白く浮かび上がるのがえも言われず、笛、鼓、謡曲の響きが木立にこもり、一流的能樂師によつて演じられる幽玄の美に一際の情趣を添えるところである。これこそ、この演能のために忙しい中で寝食を忘れて奔走し、破格の出演料で一流的能樂師を揃え、自らも奉仕で舞台を勤めて戴いた江崎金治郎師、康雄師父子の能樂にかける情熱をかき立てた所以であろう。折角のこの催しが二年だけで終らず、山崎町民文化の象徴として、町当局の講助をも得て、永く続いて欲しいと切に願うものである。



袍の紐

山崎文学会 浅田耕三

返事させた。

「直ぐに参るとお伝え下さい。」

道長は氏の長者である。その直々の招きを理由もなく断るだけの勇気はなかつた。

しぶしぶ衣服を着替えながら隆家の手は何度も止まつた。止めるたびに舌打ちした。

十四年前の長徳元年四月、非参議から権中納言藤原隆家は、同年の六月ばかりで同族の中へもめつたに顔を見せない。以前からみるとまるで人が替つたみたいで、彼が出かけるのは宮中へ参内する時ぐらいであつた。

思いがけず道長の案内を受けた隆家は眉をひそめた。

若冠十七歳である。

生まれつきの勁悍直情に若さが加わり、

貴公子にはあるまじき粗暴さよと、かつては世間を騒ぎさせた隆家のこの稀有の栄進は、当時人々を瞠目させたものであつた。

つた。

だが、蹉跎は唐笑にきた。

女である。それも自分のではない。同

腹の兄藤原伊周の勘違いの嫉妬に同情し、

従者にいいつけて藤原為光の女四の宮に

通う花山院に威しの矢を射かけさせたの

であった。(采花物語)

軽卒を悔いた時にはもう遅かった。

罪を得た隆家は出雲守に左遷され、

但馬国に配流された。長徳二年四月二十

四日のことである。伊周は播磨に流され

た。(日本紀略)

一年が過ぎて翌三年の四月二十一日、

ようやく赦されて隆家は配流地から戻つ

た。(小右記)

長保四年九月、やつと権中納言に再任、

翌十月には兵部卿にも任せられた。だが、左遷され、致仕していた六年の間に、か

つては彼が歯牙にもかけなかつた道綱、

惟忠、时光、公任、齐信らが肩を並べて上位におさまつていたのである。

不羈奔放で京童を驚かせた名家出の若者は、こうなると意外な程弱い。かつての閑達さは失せ、いつか内向的な氣の弱い男になつてゐた。

快快としてのしまぬ隆家がしばしば参内し、三条帝にのみ心を開いたのは、

そうやつて将来に望みをつなぐ氣もなくはなかつたが、それ以上に孤立無援の帝に同じ逆境にいる者の親しみを覚えたからであつた。

寛弘六年三月のある日、藤原道長は自邸の土御門殿で管絃の遊宴を催した。平安京の北東の端、土御門の南に新築した道長のこの邸は、南北二町に及ぶ宏莊華麗なもので、世人はこれを、京極の西にある所から京極殿と呼んだ。

招いた客は五十余人、刻限近く已四つ(午前十一時)頃ともなると門前はたてこめる車がひしめきあい、広い車寄せに下り衆共の高声が響いた。

宴の始まる迄、広間で先着の客達と談笑していた道長は、ふと向うの隅に藤原公信の姿を見かけた。陽気で届託のないこの人物は、今も隣の男と何やら話に夢中の様子で、道長の視線などつゆほども気づかない。

急に思いついたように道長は大きく手を打った。侍臣がくると、傍らの硯箱をひき寄せさらさらと一文をしたためた。

「御迷惑かと思うて遠慮していたが、折角の催しゆえ、やはり権中納言殿をお招きしよう。その方急いで隆家殿が邸へ行きました。仕方なく召使いを呼んで使者に



隆家の父藤原道隆は、藤原兼家の長男で、道長は同じく五男である。長兄道隆が四十二で亡くなり、ほかの兄弟も次々早世した為、ついには末弟の道長が氏の長者となり太政大臣となつて、今や権勢は並ぶものない有様である。

本来なら氏の長者は関白道隆の子たる

この自分、という思いが、隆家の胸に懊火のよう燃えている。一族の中にも隆家に同情する者、道長の横暴を憎む声がなくもない。

長い渡殿を広間の方へ雜色ぞうしきに導かれて歩いて行くと、立部たてじともの向うから不意に酒宴のざわめきが聞こえてきた。隆家は怯んだ。やはり来るのではなかつた——。

広間に入つた。巡りの朱杯が回つている。宴はすでにたけなわ、乱れた席の、その何十の目が一斉にこっちを向いた。好奇に光る目。と、道長が遠くから何か言つた。救われたようにそつちへ会釈をなつた。

「隆家殿」

入道道長が獨得の、張りのある、うたうよくな声で遠くから言つた。
「そう畏まつておられては、折角の座が白けてしまう。早くその袍の紐をお解きなさい。」

語尾がたしかになじつてゐる。隆家は

むつとなつた。が、慌てて袍の衿元へ手

をやつた。その時である。座中の一人がひょろりと立上がつた。從四位上、近衛少将藤原公信である。すかずかと隆家に近づくと、いきなり手を伸ばして隆家の衿元をつかんだ。おそらく乱暴な手つきである。

「身みが解いて差し上げよう。」
かつと酒臭い息が、隆家の鼻腔を襲つた。

知らぬ間に隆家は立ち上がつていた。目がくらくらして、息がつまつた。目の前に公信のはだけた胸元がある。どんと突いた。公信はよろけ、したたかに尻餅をついた。膳の上の器物が飛んだ。

「いかに落魄しようとの隆家、其方如きにかよくなあつかいを受ける覚えはない。」

人々は呆然として、つつ立っている隆家をみつめた。

民部卿源俊賢などは、うろたえた目できよろきよろとまわりの顔を見回し、

「へええ、これはまた厄介な、ああなつたら隆家殿、そう簡単にはひきさがりませんぞ。何しろふだん抑えに抑えていますからな。」

道長がやつてきた。突つ立つた儘蒼白な顔でぶるぶる慄えている隆家の肩に手をかけた。満面溢れんばかりの笑みであ

る。

「これは隆家殿、せつかくおいでになりながらそんな冗談をなさるものではありません。今日は久し振りにあなたのお顔を見て、うれしう思うているものを、どうぞ御機嫌をおなおし下さい。」

そして声をひそめた。
「これは道長の設けた席、お忘れなさいますな。」

きらつと一瞬、隆家の顔を覗き込んだ道長の目が光つた。が、それは文字通り一瞬で、再びつやのある、まろやかな声が、

「上げ紐はこの道長が解いて進ぜましょう。さ、遠慮のうおくつろぎ下され。」

四半刻程のちには、隆家はいつにない晴れやかな顔で、丁重懇切な道長相手に、しきりに杯を重ねていた。

その日隆家は久し振りに酔つた。こんなに酔つたのは何年ぶりだろう、道長の優しい心遣いがうれしかつた。歌い、舞

きよろきよろとまわりの顔を見回し、宴がおわり客もあらかたひき上げたのち、道長は自分の居間へ戻つた。

追いかけるように最前の公信が居間の前までやつてきて得意氣な顔を入口にのぞかせた。道長はその方を一瞥した。が、

すぐに目をそらした。無言である。

「思いのほかにたやすうござつた。」

醉いで目のとろんとした公信は相手か

まわぬ大声で言い、けれど道長が何もこたえぬのでゆるんだ口元でべらべらとしゃべりだした。

「これでお二人の御器量の違いは、とくと世間に知れましょう。氏の長者も、なるべきお人がなられたとみな納得いたします。まずはお目出度いことと……。」

道長は急に手をあげてそれを制した。「そなたも随分と粗暴で早合点をする男です。まずはお目出度いことと……。」

道長の目を見て急に黙つた。狼狽がうかんだ。

「二藍のいの直衣の裾をひるがえして公信が気負いたつて不満を言いかけた公信が、道長の目を見て急に黙つた。狼狽がうかんだ。

足早に去ると道長は縁に出た。広い庭の向うに並んだ楠の若木の上に晩春の日が暮れようとしている。大きく息をして道長は、嚙むせるような若葉の香を嗅いだ。

* 参考『大鏡』、『栄花物語』、『日本記略』、『小右記』。



チベット旅行断章 鳥葬のことなど

山崎文学会 安井道夫



●ラサの街角●

河口慧海の「チベット旅行記」には、一妻多夫婦などとともに、鳥葬も非常なる不思議な習俗として紹介されている。慧海が入学滞在したセラの大学から、わずかばかりの道のりの墓場で、彼が実見したところの葬儀の詳細を、驚き呆れながら報告しているのである。

死骸を解体し、チャ・ゴエ（禿鷲）の食へやすいように、肉は肉で細かくぎみ、骨は骨で、頭蓋骨なども岩の穴の中で叩き碎いて麦こがしの粉を混ぜ、団子

のようにして与え、残るのはただ死者の一妻多夫婦などとともに、鳥葬も非常なる不思議な習俗として紹介されている。慧海が入学滞在したセラの大学から、わざかばかりの道のりの墓場で、彼が実見したところの葬儀の詳細を、驚き呆れながら報告しているのである。

その作業は相当暇がかかるため、ひとりは途中でバター茶を飲み、ツアンパンを食べる所以であるが、死骸の骨くずや脳味噌で汚れた手も、拍いで払つただけの手づかみで食べる所以、慧海には堪えられぬほどの不潔感を呼び起したようである。

その慧海から半世紀過ぎた一九五八年の夏、川喜田二郎を隊長とする西北ネパール学術探検隊がヒマラヤの北方シアルカ村で鳥葬を実見、逐一映画にも撮り、その放映はひと頃の話題をさらつたことがある。

川喜田隊の記録は、ひたすら仏教研鑽を目的とする慧海とは異なり、異文化理解自体を目的とするだけに、何一つ見落すまいとするより客観的な

記録であり、グループによる多元的な視点からの、日本における文化人類学の先駆けとなつた情熱的な報告であると思う。

ただし、その対象は同じチベット族とはいえ、本国からは辺境のヒマラヤの地であり、ラマ教以前のボン教も生きている、もっとも保守的な風土である。

私たちの興味は、解放後、着々と近代化のすすむラサ周辺において、いまだ昔ながらの鳥葬が行なわれているだろうか、ということにあつた。

北京総社から駆けつけてくれた李廣林さんは、広州で会つた早々から慧海の旅行記が話題になり、その後、様々な私たちの要求が、旅行中李さんを悩まし続けたことと思う。

慧海の足跡めぐりのうちでも、標高五千米に近いカンバラを越え紺碧のヤムド湖畔での昼食、夏の宮殿のリンカの見学など、李さんは相当私たちに譲歩し、便宜を与えてくれたのではあるが、鳥葬の件では、腫れ物に触るような中国の少数民族政策を代弁するばかりであった。「それはチベット族の昔の特殊な慣習ですか」と李さんはいう。

私たちのタラサ滞在も最後に近い一九八〇年六月二十八日夕、解放前、ダライ・ラマの秘書長であつたトテンタンタさん外三名の元ラマ達と座談会を持つことが

記録であり、グループによる多元的な視点から、日本における文化人類学の先駆けとなつた情熱的な報告であると思う。慧海の鳥葬の記述は、元ラマ達は何の遠慮もなく明解に答えてくれた。現在、チベットで行なわれる葬法には四つの方法があり、何よりも尊重されるのは死に行く本人の意思であるという。火葬はごく少数、稀にラマ僧にみられる。土葬は子供が天然痘で死亡したときのように、他に伝染の恐れがある場合にやむなく行なわれるだけで、一般には非常に嫌われている。水葬は重罪人の刑執行の手段であったこともあり、また場所的にも限られる。そして、圧倒的に多いのは、やはり鳥葬で、このことについては慧海の時代と変わらない。

チベットは死者に近い国である。死体を利用して作つた樂器をもつて仏を供養し、カバラ（頭蓋骨の器）によつて供物をささげる。死は、チベット高原を吹く乾いた風にのつて、つねにひととのこころの中に浸透しているようである。

できた。

その席上、ラサ三大寺の一つで、チベット新教黃帽派の祖師ツォンカバの創建になる名刹ガンデン寺が、四人組の影響

下、紅衛兵の内ゲバで残らず破壊されたということ、またレブン一寺をとつてみても盛時には、僧徒一万を擁したという

のが、いまでは全チベットで十ヶ寺、約九百名のラマ僧しか居ないということなどを聞いた。

さて、死者儀礼についての私たちの質問にも、元ラマ達は何の遠慮もなく明解に答えてくれた。現在、チベットで行なわれる葬法には四つの方法があり、何よ

りも尊重されるのは死に行く本人の意思であるという。火葬はごく少数、稀にラ

マ僧にみられる。土葬は子供が天然痘で死亡したときのように、他に伝染の恐れがある場合にやむなく行なわれるだけで、

一般には非常に嫌われている。水葬は重罪人の刑執行の手段であったこともあり、

また場所的にも限られる。そして、圧倒的に多いのは、やはり鳥葬で、このこと

については慧海の時代と変わらない。

チベットは死者に近い国である。死体

を利用して作つた樂器をもつて仏を供養

し、カバラ（頭蓋骨の器）によつて供物

をささげる。死は、チベット高原を吹く

乾いた風にのつて、つねにひととのこ

ころの中に浸透しているようである。



隨想

文学再入門の記

山崎文学会

折りにふれ、エツセイを書いたり、短編を書いては発表する機会もなく、未完の書を書いたりしてゐる。また、書棚の片隅に放つておいたりで、それはそれなりに、私を慰め、又或る時は力づけもして呉れたものである。

数日後、早速私は昔書いたいろいろな原稿をとり出して、読み直して見た。すこしかり黃ばんだ原稿が如何にも長い疎遠を物語つてゐる様だった。心はずんで、読み始めたのだが、しばらく読んで行くうちに、次第に失望を感じかけた。自分の書いた文章に自己嫌悪を覚え始めたのである。つまり自信がもてなくなつて来る。

か「六の宮の姫君」などに見られる様に非情な運命に泣く人々があるかと思ふと、「鼻」、「芋粥」などの様におかしくても笑へぬ喜劇等々……。

そこには、様々の人間の哀歎が殿上人と云はず、地下人と云はず、都を舞台に渦巻いてゐる。私はこの世界に強い興味を感じ、随分と、その世界を研究したものである。そして、それと共に私の空想の羽はとどまる所なく翔けめぐつて、いつの日か、それらを題材に、数編のスト

綱爛たる王朝文化の隙に繰りひろげられる貴族の権力争ひ、恋の物語、その裏の社会にうごめく盜賊の群れと彼等の残虐なまでのエゴ、或は又、「葦刈り」とか「六の宮の姫君」などに見られる様に非情な運命に泣く人々があるかと思ふと「鼻」、「芋粥」などの様におかしくても笑へぬ喜劇等々……。

からなのである。
しかし、あれから、父も亡くなり、數
十年の歳月が過ぎてゐる。その間、ペニ
をとつては投げ、（）と云つた状態で、
殊に、学校の勤めをやめて、家業に専念

様のことが云へるのだが、この時代は武士階級と云ふ一定の世界のパターンにはまつたものであるが、今昔のそれは自然で、素朴で、然も多彩である。

のことでもあるので、二つ返事で参加させて頂くことにした。和田氏が私を誘はれたのには、それなりのわけがあつたのである。と云ふのは、和田氏と私の父は旧知の間柄で、父を通じて、私が趣味で小説を書いてゐることを知つておられたからなのである。

私はこの世界はと人間かいの意味で、赤裸々に生きた時代はないと思つてゐる。戦国の世も、或る意味で、同

たのだ。文章は稚拙で、描かれてゐる人物は、例へて見ると、小学生のかいた人物画の様である。これでよく、いろいろな雑誌の新人賞などを夢みたものだと、今更の様にガッカリした。

元来、私が最も書いてみたいと思つてゐたのは芥川龍之介が好んで書いた今昔物語の世界なのである。

今度、読み返した今昔ものの一つに、未完なのだが、「桔の邸の話」と云ふのがある。七條堀川近くに住む芸熱心な猿樂師の若夫婦を中心に、その隣りに住んでゐる、怪しい祈禱を売物の老婆や、青雲の志も空しく、今は無賴の徒になり下がつた藤太と名のる若者、そう云つた人の人間的な糾を織り交ぜながら、平治の乱と云ふ大きな時の流れを背景にして、その戦火に巻き込まれて行く姿を描いた話なのだが、読み直してみて、如何にも、

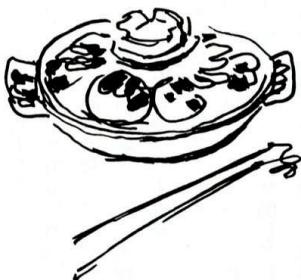
な所にもあつたのを
んでゐるのである。

それは、ひょっこりと、私の手のひらに現はれて来て、懐しげに、私に話し掛けて来る様な幻覚をさへ覚えさせて呉れたものである。長い空白期間があつたせいもあるが、小説を書く楽しみが、こんなに感じたことである。

——りーでも書ければ、「新今昔物語」と題して、一冊にまとめて見たいなどと、大それた夢を抱いたものである。それも、この分では誠に心もとない話ではある。自分のとり組んだ世界が余りにも大き過ぎたことに今更の様に気付いて、もて余してゐると云ふのが本音の様だ。
だが、反面、大変うれしい思ひをしたこともあつた。

これでは藤太に救ひのないのが気になつて、可愛想に思へて來た。これも、どうやら年のせいかも知れないなどと思ひながら、そこで、彼を最後に若い猿樂師をかばつて、流れ矢に當つて死なせることによつて、彼に救ひを与へることにした。

これで私もほつとしたのだが、やれやれ、その代り、又途中から書き直しと相成つたのである。これで、この作品の完成も何時のことやら見当もつかないが、これ



(隨想)

郷土の歴史と文化

について

山崎文学会 根岸元彦

今世紀は歴史の世紀ともいわれています。歴史に基盤をおいた思想、即ち歴史哲学が世界を大きく変えました。例えばヘーゲルの説いた歴史哲学に導かれて、マルクスやエンゲルスが唯物史観をとなえ、それによって共産主義思想を確立しました。それが今や地球を東西に二分し、世界の政治や外交を振り動かしています。たしかに「歴史イコール文明であり、文化である」という命題は正しいと思います。近代文明を研究するために、そのルーツである歴史を解明することは、歴史主義世界觀の中心課題であります。人

も、アマチュアの楽しみの一つと、諦めるより仕方がない。

さて、振り返つて、私も随分年をとつてからの文学への再入門、加へて、俗事に追はれながらの身、果して、どれだけパンがとれるか、わからぬが、これからは余り肩をいからせず、楽しみながら、繰り返す人の世の哀歎を、温かい目でとらへて、パンに表して行ければ、これ程幸せなことはないと思つている。

間が猿から分化して人類となつた昔から、その歴史の積み重ねの上に科学を発達させて、現在の人間の姿を築き上げていつたわけです。だから歴史を研究することが、文化を解明することに通ずるということは正しいと言えるのです。

そして今や歴史関係のものは、学術でも文芸でもブームの様相を呈していますが、ひるがえつて考えてみれば、歴史や文化のルーツといつたものは、必ずしもジャーナリズムが取り上げるような所だけに、「あるのではない」と思います。むしろ歴史の重大さは我々の住む地域、つまり山崎にあり、宍粟郡にあると思うのです。この郷土にも人類発生以来の歴史が積み重なっている訳ですから。日本の歴史とは何も奈良や京都や鎌倉だけにあるのではない。だから山崎町民にとって最も関心を持たねばならないのは、山崎の歴史であり成り立ちでなければならぬと思うのです。

山崎の中心街が形成されたのは約四百年前、当時の藩主木下勝俊の「新町申付書」が一応の目安です。城下町の癡祥としては、姫路や竜野や赤穂と変りないはずです。明治維新の際に新政府の政策で廃刀令、断髪令、城郭の取り壊しなど、古いものは皆駄目となつたのは、終戦後の日本の状態と全く同じです。こ

は大きすぎて残つてしまつた。当時姫路城内の天守閣を含めて、姫山公園一帯が千円で売りに出されたといいます。当時の千円は大金でしたが、人夫の日当が十円を越してしまつて引き合わない。それで偶然残された姫路城は今や天下の名城として国宝となつてゐる。現在お城まつりや城下フェスティバルなど、何億という金をかけて懸命にやつて見に見えますが、姫路の文化人に言わせると、市当局や市民の意識の低さから、お城だけにすがりついて何の文化も育たないとい嘆く。わたしの親しい作家など「姫路は遂に文化不毛の地だ」とまで極言する、まあどんな理由があるのか知りませんが、彼には彼なりの言い分があるのでしよう。

昭和の築城などと記憶するのですが、前市長の手腕でまたたく間に立ち直り、その余力で次々と文化施設を作り上げているようです。再建出来れば先ずやりたい公共事業は山程あるだろうのに、一見何の役にも立たないお城の復元を考えるなど、理解に苦しむ向きも多いでしょう。それに竜野に城があつたなど聞いたことがない。昔雞籠山の上にあつたそつだが、それは

篠の丸城ぐらいのものと思っていました。最近聞いた所では、元の女学校の跡だとう。それならせいぜい藩主の邸館程度のものに違いないと思われる。

それに引き替えわが山崎城は外濠も内濠も備え、御門も隅櫓も残っているし、

当初六万石の藩侯の居城として、赤穂城にもひけを取らない堂々たる規模である。

それが一方では昔の御門を復活し、片方

は穴を掘って水を溜め、あまつさえ数百

年の歴史を物語る巨木を伐り倒してしまった。これは一体どうした事かと思う。

だがしかし、わたしは何も昭和の築城が立派なことだと言っているのではない。

ある面から見ればそれは一つのナンセンスであり、人によれば無駄金遣いの標本であるかも知れない。しかし対象は何であれ昭和の築城が成立するには、市民の間に相当のコンセンサスと同感がなければならないはずである。郷土の歴史を尊重するという住民達の暗黙の同意の上でなければこのような事業は成立すまい。

それは例えば今山崎で昭和の築城でもやろうかとの議が起つたと仮定した時、予想出来る反対の度合いやその理由を考えてみればすぐ理解出来ることだ。

文化は金を産まない。又一見浪費にさえ見える。だが一方から言えば、文化は金では買えないものなのだ。この世の中では、金で買えるものに大したものはない

いし、金にならなければやらないといつた姿勢には文化は不毛である。そして金を出しても買えないものが真に尊いものなのだ。金で買えないもの、それは信仰であり、愛情であり信頼であり、その他

もちろである。文化はその中でも最も偉大なもの一つである。わたしは愛する郷土山崎が、文化果てる処とならないことを心から祈る。

山崎町俳句大会開かる

山崎町俳句協会代表
和田疎人

我が山崎町俳句協会では山崎町文化連盟の懇意により十一月十一日、楠風閣にて山崎町俳句大会を開催したが出句数一八〇句に就て、原田魚梯（俳人協会）、中野秋藻、岩井夫城、和田疎人（各九年母同人）が選に當り、谷口山崎町長、森岡議会議長の祝辞の後、各選者が入賞、入選句に就て短評を試み左の通り決定した。

山崎町長賞 山崎・原田驅雲女
月高しすでに城なき城下町
山崎町文化連盟会長賞 山崎・小倉 悠丘
堂ぬちに寂光満てり秋彼岸
山崎町議会議長賞 山崎・山口美根女
降り止まぬ雨月の軒の薄明り

特選▼原田小次郎（山崎）・三幡林風（安富）、高野志都代（山崎）、山中恒女（山崎）、田中春園（山崎）、安井方円（山崎）、

新雪の大山眩し初御空

春名游之（千種）

苗代の苗けちらして鳥交る
ふたたびの時雨に淡き虹生る
十夜粥リレー送りに受けもして
転がせる柘榴陶器の艶を持つ

雜魚光る籠に折り添え猫柳
空蟬の縋れる草も紅葉して
大飛沫あげて進水秋晴る、
溝川の曲れば曲り曼珠沙華
來るは個々翔つは一齊稻雀
空蟬の縋れる草も紅葉して

坂本昇、山田東軒、田中恵、横尾惠風、
田村るみ子、青柳一子、安黒義郎、森
谷愛子、山田いそ子、谷林はつえ、梅
田梅風、石野みづえ、佐々木安雄、日
島鶴粹人

入選▼猪尾月峰、原田有里、長田久也、
小畑柏人、福田泊水、高野南嶺、松本
権三朗、中野治水、山野源子、小紫い
く女、横井雪枝、戸田五山、田村全一、
中野秋藻、岩井夫城、和田疎人（各九年
母同人）が選に當り、谷口山崎町長、森
岡議会議長の祝辞の後、各選者が入賞、
入選句に就て短評を試み左の通り決定し
た。

俳句

「青嶺集」

五指入れて手袋生命得たりけり
ぬぎすて、手袋生命失へり
聖人の像は杖笠夕時雨
牡丹の影に我が影重ねけり
娘や孫に老見せまじく初鏡
霜柱踏み荒しつ、牛を耀る
植木市種物市と春めける
猪垣の解かで小山田冬ざる、
生還の父の水筒遠足兒
手袋の色競いおり校舎裏
柏汁に凍ていし夫の煩ゆるむ
猶夫のみ知る深山木の帰り花
霜柱踏み荒しつ、牛を耀る
植木市種物市と春めける
猪垣の解かで小山田冬ざる、
生還の父の水筒遠足兒
原田驅雲女
原田 有里
原田 泊水
三幡 林風
村元 優子





郷土芸能を通じて 又、その活動

郷土芸能保存会
塙本重郎・兵衛

今日郷土芸能は、ただ風習や神社に奉納するだけでなく、私達の心のふるさととして意義あるものであり、伝承を通じて人と人の交流や会話により、郷土愛がはぐくまれるものと信じます。又そうした事により一層の知性を高め山崎町の文化向上の一端として寄与するものであり、その重要性を重んじ活動しております。

現在山崎町内の宇原・川戸・高所の各

昭和五十四年秋の芸能祭には川戸獅子舞を、昭和五十五年秋の芸能祭には高所の獅子舞・塙田の千本撃、昭和五十六年の芸能祭には宇原の獅子舞「相之山」と結成されました。

昭和五十四年秋の芸能祭には川戸獅子舞を、昭和五十五年秋の芸能祭には高所の獅子舞・塙田の千本撃、昭和五十六年の芸能祭には宇原の獅子舞「相之山」と

「岡崎」が披露され大変な好評を得ました。昨年十月十日の宇原の秋祭りには、岩田神社境内において、江戸末期頃より受継いできた伝統ある梯子獅子舞が、山をなぞらえた高さ六メートルの梯子にお猿の道引で登り頂上で見事な神楽の舞の演技には、

珍らしい餅つきであります。

川戸・高所の獅子舞も非常に華麗・勇壯であり、塙田の千本撃も近在にはないハラハラしながら見守る多数の氏子の人達より激賞を受けました。

宇原の獅子舞「相之山」とも戦中戦後を通じて承らく絶えていた民俗芸能に対する理解者達により保存会も結成、種々の問題をかかえながら一層充実したものに育てて行きたいと考え皆様今後共ご支援、ご協力の程重ねてよろしくお願ひいたします。

炭手前白檀の香室に満つ

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎ行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横尾 恵風

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎ行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘
参觀の皇居は広し法師蟬

中野 治水

礎石打つ音冬雪に響きけり
秋深き夜半を一途に陶土ねる
柳散る下人寄らぬ古ひ師

横井 雪子

藤袴生ふてふ峠の花野かな

愛らしき漫画の布団初孫に

布団干す団地の窓のよき日和

注連飾終え校庭の静まり

梟の啼きてみどり児寝静まり

走りゆく野火雨の箭が搏ちやまず

丁字の香濃し月の暁うるむ夜は

山中 恒女

浦曲に老綱つくろいぬ秋の昼
摘みためし龍胆は濃し花野行く
仔鰯跳ね運河の月をさめかす

高野 しづ

たんぼは凹座の如く葉を延べて
誰が先に嫁ぎに行くか春者の娘

短歌

○第一回郡民短歌祭入賞歌

・知事賞

ありのまま言はばみじめになりゆかむ

胸刺すごとく稻妻光る

大谷 吉次

□□ 藤村省三 □□

・県会議長賞

早苗田に補植する指掠めつ瞬りしば

かりの蝶蝶が散りゆく 日下ふさゑ

この弾にあたりて死なば樂ならむと思

ふときふと妻の顔顕つ 松本 富治

露草の露に濡れ咲く徑をゆく夫逝きて

よりよきことのなし

亡き男夫のよりたる古き椅子いつまで

生きて我の坐るや

夫あらば茶をくみくれむ娘のをらば飯

たきくれむ病みつつ思ふ

かたくなに娘の招きこばまねど離れが

たなし夫のなき家

亡き夫の法要終へ夜となりぬ残りし

ものはかくも侘しき

○山崎歌話会合同歌集「青山脈」より

夕影にやさしき肩を寄せ合ひて何語ら

すや野のほとけたち

稻村 幸子

聞きてやるのみの空しさ卓の上に置か

れし水菓融け初めたり

井口 隆子

忘れ得ぬことも忘れし貌をしてありふ

る日日に花は終りぬ

大井 秀子

先生も労働者なりと主張して先生を殴

る子を育てたり

大前 静枝

桃なせるお臍真中にある腹はいたく小

さし墨絵の菩薩

安井 俊二

逆境と言ふには淡きかなしみに朝あさ

拭ふ食卓の塵

山崎きよ子

○山崎歌話会合同歌集「古き椅子」より

夕影にやさしき肩を寄せ合ひて何語ら

すや野のほとけたち

稻村 幸子

聞きてやるのみの空しさ卓の上に置か

れし水菓融け初めたり

井口 隆子

忘れ得ぬことも忘れし貌をしてありふ

る日日に花は終りぬ

大井 秀子

昭和大正明治と歳を逆算して思はぬ老

を友と嘆かふ 北林 祐道

可能なる未来をもてる若人らつぎつき

に来て橋を渡れり

富治両氏を選ぶ。

第一回郡民短歌祭を下村記念

館に於て開催。参加一二二名。

山崎歌話会は結成五十周年を

12 · 6

岸原史子氏逝く。

記念して合同歌集「青山脈」
を出版。参加十八氏。

12 ·

○おしらせ

山崎町には左の短歌会があつて、皆さ

んの入会を歓迎しています。

・山崎歌話会。例会第一日曜

・新樹短歌会。例会第三日曜

・老人大学かしわの歌会

・事務局・本町えびや方

・藤村省三指導

・新樹短歌会。例会第三日曜

・老人大学かしわの歌会

・藤村省三指導

・新樹短歌会。例会第三日曜



尺八と私

福山 司城

尺八を手にした事のない人が現在の尺八音楽を聞く時に（その人が音楽的に訓練されておればおる程）科学的に不満が多いのではないでしょう。他の楽器（箏）

の合奏の場合に例をとれば音程、音力の不自由が三、四ヶ所の半音の次の一段階低い音の不完全さがよくわかり、楽器としては不完全な楽器と思われていると推察できます。

尺八の歴史なるものを考察すれば、これは永い間佛法の法器として、精神修養の具として取扱かれたもので楽器となつたのは最近のことです。尺八をやるものは、尺八は不完全な楽器と知りつつ、その音を楽しみその技巧を喜んでいるもので、僅か五ツの孔でよくこれだけの音律があるものだと感心し、尺八は修養楽器であると信じております。私も一時は洋楽の吹奏楽器でもやれば音程も、音域にも不平不満がないと思ったことがあります。しかし尺八にはそれにかわる以上の偉大な力があつたのです。音色の「妙」、技巧の「妙」、この「妙」・「妙」が集

まつて我々を益々尺八道に精進させたのです。

修養樂器といえば先ず音程や音量は第二として、第一に精神の修養に重点をおくことになります。我々はこの考え方から尺八道と呼んでいます。上田流始祖は、「夫れ尺八道は竹の如き心もて仁、義、礼、智、信の五孔を堅く握り締め、誠心を以て吹き貫くを謂う也」と教えておられます。

我々尺八道に志ざすものは自己の人格の完成を目指して今後も益々研修を重ねて行きたいと念願しております。

（流祖『砂に描く』より一部引用）



稽古と作意

庄 和夫



茶聖・千利休居士が茶道の奥義を示唆した言葉は多いが、「山上宗二記」の中にも見える、稽古と作意と云う言葉は、道

あり、現代の教育の方法に通ずるもので、私の心を深くとらえます。

即ち茶の道に志ざす者は稽古と作意が必要で、そのどちらか一つを缺いても、御茶にならないことを、はつきり教えた

葉が今日尚生き続けている感を深くする一人です。

ものです。稽古とは文字通り、古えに稽きたりを、しきたりとして、そのままに忠実に習うという、保守的な在り方であります。作意とは、時と場合に即応して新しい工夫を凝らすこととで、進歩的であり、創造的な行き方であります。この教えをどちらかに傾いてもいけないと云うのが、正確につかんで、稽古と作意に励みたいものです。

今日芸道の練習に於て、と角、古い

きたりを軽視して稽古を怠つたり新しいものに走る傾向がありますが、稽古、即ち古いもの、伝統的なものをしっかりと習つてこそ美しい花が咲き、実を結ぶものだと思います。之を現代の教育に置き替えてみると、稽古とは教材をしつかり教えること、生徒の側からすると教材をしつかり習うことになりますが、稽古とは、反覆練習することとも云えますが、今何となく、この点が軽視され、作意の方に傾き、生徒の主体性を重んじすぎる傾向がないとも云えません。両々相まってこそ正常な教育と云えましょう。先哲の言葉が今日尚生き続けている感を深くする

「やまさき文化」発刊に寄せて

前野 四郎



このたび「やまさき文化」が創刊されることになり、「山崎郷土研究会」も文化連盟に所属する文化団体として衷心よりお慶び申します。

郷土研究会も会報を年二回発刊いたしておりますが、郷土研究会の歴史は古く昭和三十三年六月に創刊号が発刊されており現在まで第五十七号まで発刊しております。創刊号には当時の村上彰治町長の発刊の辞が最初に掲載されております。

郷土研究会も会報を年二回発刊いたしておりますが、郷土研究会の歴史は古く昭和三十三年六月に創刊号が発刊されており現在まで第五十七号まで発刊しております。創刊号には当時の村上彰治町長の発刊の辞が最初に掲載されております。

過日山崎文化連盟から来た封筒の表に

「心ゆたかな町づくり・ふるさとづくり」ということが書かれていますが、郷土研究会も山崎町の文化の向上を目指し心ゆたかな町づくり・ふるさとづくりの為に

微力を尽したいと考えております。

今後はこの「やまさき文化」が加入連盟各団体の相互連携と親睦の広場として益々発展することを祈念し、創刊のお祝いの挨拶いたします。

次号からは郷土研究会としての記事を投稿いたしたいと思っております。

山崎郷土研究会会长

「やまさき文化」の発刊に寄せて

金井信治

当時は宍粟郷土研究会で会員は四百名足らずですが、現在は六百名を超える会員となっています。第四十号からは会報の名称も「宍粟郷土会報」から「山崎郷土会報」と改められております。創刊以来郡内に秘められた史実、伝説、民話等を皆様方に紹介して参っております。最近では島田清先生の「近世初頭の山崎藩」について第四十号から第五十七号に亘つて連載していただいております。昭和五十七年は山崎闇斎先生、生誕三百年に当るので二月七日午後一時三十分から下村記念館に於て島田先生の闇斎先生に関する講演会を開催する予定にいたしておりますので町民の方々の御聴講をお願いしたいと思っております。

過日山崎文化連盟から来た封筒の表に「心ゆたかな町づくり・ふるさとづくり」ということが書かれていますが、郷土研究会も山崎町の文化の向上を目指し心ゆたかな町づくり・ふるさとづくりの為に微力を尽したいと考えております。

これを期に、今年行われますさつき祭には、記念展示会を共催したいと、立案致しております。

当町ではさきに、町花にさつきを選定し、又さつき祭開催二十周年記念としてさつき音頭の制定と、さつき踊りの振付がなされ、さつき祭が県の文化百選にも選定されました。

県内の、観光百選に認定されておりま
す最上山公園に拾万本のさつきを植栽し、
さつき公園として新しい名所にすべく、
町内各団体に協力方を要請し、着々と進

山崎町文化連盟機関紙「やまさき文化」

の発刊を、お祝い申し上げます。私達「さつき会」が、文化連盟の一構成員として加えて頂き、さつき作りを通じて、山崎町の文化向上に、多少なりとも寄与できればと考えております。当さつき会は終戦後の食糧難が稍落ちつきかけた頃、樽岡定二氏をはじめ、今は亡き小畑耕二氏、武藤林之助氏、田中稔氏等他多数の先輩同好の各位が、さつき展を催され、昭和三十二年播磨さつき会として発足致しました。

ましてより、今年で満二十五周年を迎えます。

これで期に、今年行われますさつき祭には、記念展示会を共催したいと、立案致しております。

当町ではさきに、町花にさつきを選定し、又さつき祭開催二十周年記念としてさつき音頭の制定と、さつき踊りの振付がなされ、さつき祭が県の文化百選にも選定されました。

このように山崎町とさつきとは切つても切れない間柄にあると思います。

私達さつき会員は、猶一層栽培技術の向上と普及推進に努め、さつきの町山崎の名を高めたいものと考えます。

文化連盟所属の各会の方々のご指導、ご鞭撻をお願い致しますと共に、本連盟の発展と、やまさき文化がよりよき機会となりますよう祈つてやみません。

終りになりましたが、編集委員の方々ご苦労さまです。

播磨さつき会会長





新潮会の歩み

取
越
三
郎

新津会は昭和二十七年六月明治末期及び大正生れの、時代感覚を同じくする者二十数名相集い発足いたしました。早くも、本年三十周年を迎えるに至りました。

目的として、政治、経済、教育、芸術等を真摯に研究琢磨し、且つ会員相互の親睦を図り、自己の品性を高め、修養に

挫折して投出す人もあるが此道何十年も続いていると止めるに止められない環境に置かれてか、又は其雰囲気に魅せられてか生懲りもなくだらだら続いている人も多い。謡を現に習われている方に申上たい事、大成版謡本は正確無比に出来て

能楽の詞章謡曲は仲々味のあるもので、あるが半面難しい事も多い。初心の間は節にこだわり声が上ずる。難句が読こなせない等で苦労する。更に強吟弱吟の区別、拍合、拍不合の謡分け、ノリ地でも平乗、中乗、大乗、小歌等の解釈、少し深くなると地拍子、緩急、位の取方等で何と難しいものか。誰がこんな事を考え出したのかと疑問は深まるばかり。途中

口等の製本名 称等も半らぬ所は師授を受け謡に取組まると能の位が判り謡が妙な方向へ脱線しない。それと年に一、二回位は京阪神の本舞台で演能を観ること謡や型の参考になり進歩に役立つと思う

最後に山崎へ来て謡を教えた先生を招き
介する。福王流ワキ方一姫路—江崎直言
師（六代）、直郷師（七代）、文次郎（八代）、
菊次（九代）、茂（十代）、康雄（十一代）、何
れも本名。六代目百二十年觀世流シテ方
一竜野—大西俊治師（片山博通門下）、橋
田義一郎師（大西信久門下）、一京都—塚
本哲也師（杉浦義朗門下）、一大阪—大西
信彦師（大西信久師弟）。

語は耳と口の学問であつて目や頭脳の藝術ではない。自分の好む部分だけでも無本で誂える様努力されること。本に縛られては本当の誂は誂えない、頭空っぽでも口が勝手に動いているのが理想で、此点自動車の運転とよく似ている。

努め、良識ある町民となり、山崎町の文化発展に微力乍らも貢献したい念願を持つて誕生したのであります。

政治に関しては無色透明を旨とし、思 想的には中道を歩み、新に銜らわす、旧に堕せず、家庭の和楽に務め、地域社会の発展向上に務める精神を堅持しています。特に吾々会員の、誇りとするところは三十年間、毎月一回の例会を缺かすことなく、地域の諸先輩方、同郷の学識経験者を招待し、会員相互の知識涵養と修業を図り、併せて懇親を深めていることであります。

亦機会ある毎に地方の名士、文化人等による講演会、座談会を催し、地方文化

の発展推進に努力をしてまいりました事は、町民各位の絶大なる協賛を得ている事と信じています。三十周年を迎えた現在、過去数多くの諸先生方を列挙する事は出来ませんが、特に感銘深いこえを挙げておきたいと思います。

薬師寺管長橋本凝胤、評論家嘉治隆一、文學者辰野隆、吉川英治夫人吉川文子、評論家大宅壯一、辻正信、俳人中村汀女作家杉本苑子、等諸先生方は特に印象深いものがあります。我々会員の多くが、初老から還暦が過ぎ老境に至りましたが、いよいよ若々しい所期の精神を忘れず、町より贈られた「文化功労賞」の名譽に恥じない様努力を致したい覺悟であります。



信彦師(大西信久師弟)

田義一郎師(大西信久門下)、—京都—塚
本哲也師(杉浦義朗門下)、—大阪—大西

最行に山崎一考（吉野義）が分写を取
介する。福王流ワキ方一姫路江崎直言
師（六代）、直郷師（七代）、文次郎（八代）
菊次（九代）、茂（十代）、康雄（十一代）、何
れも本名。六代目百二十年觀世流シテ方

茶の心をたどりて

神山宗明

昭和四十六年二月、建国記念日の佳き

日に、茶道研修会は使命を以つて立上りました。

室町幕府八代將軍足利義政が、村田珠光に對して「茶とは」の間に珠光は、謹敬清寂以つて天下泰平となす、と喝破された。

のち千利休の和敬清寂も同様で、茶の道を歩みます私たちはこの根本理念を第一に、社会をよくし人を幸せにしたいとの一念から発足致しました。

当初、この趣旨に、安井金三郎、本條猛一、前野四郎、小田静各氏の御鞭撻を頂きました。しかしながら非才なる私が皆様に呼びかけ致します事は、最高の場にて洗練せねばならぬ思いでした。折から、裏千家主催の学校茶道教授者の集会が大津紅葉園で開催されたので出席いたしました。私の茶道に対する信念はこれでよいのか、と「茶の精神」、「学校茶道のつれづれ」の文書を提出したが、図らずも、鵬雲宗匠のお目どおしを得、今後家元今日庵にて勉強せよとの異例の入門を許され、只感慨無量、心引きしめ毎月参庵し、宗匠の道話訓（業跡）の指導を

頂きました。

又私たちは、幸にも身近にいてくださいます哲学者、庄静夫先生のご理解を得、

本会の会長ご承諾を頂き、毎月研修会にて教導頂くこととなり感謝の至りです。

一方、柴山禪僧様は年中全国布教の身

の上ながら、時をさいて教導頂き、御令室宗玉先生は卒直にご賛同頂き副会長として協力頂いております。只管長様のおかげにて十二周年を迎えました。

つきましては、鵬雲斎宗匠の提唱され

る「国民皆茶」で、人間復興を目指し、この会はモンベをはいて始まりましてよう、皆様も茶を心安く味つて協会のお茶会にも樂しんで来て下さいます。

私たちは、仏教の心、禪の心に近づくため、和敬清寂にいそしみ「つしみ深く、おごらぬさま」、人間復興のため茶道研修会は精進いたします。どうかご理解とご鞭撻下さいませ。

今日に至るまでの、前野四郎先生のご指導を感謝いたします。拙ないエッセー、お許し下さい。

茶道研究会副会長

山崎闇齋先生三百周年祭について

奉贊会長 前野四郎

闇齋先生の曾祖父淨榮は播磨の人、祖父淨泉は山崎生れ豊太閤の正妻北政所の兄姫路城主家定に仕えた。家定の長子勝俊は山崎と龍野の城主であった。その弟

利房は山崎城主から関ヶ原の敗戦後備中足守に転封された。闇齋の父淨因は家定

京都の下御靈神社の中に垂加社と称して闇齋先生をおまつりした宮があります。五十年前には闇齋先生の学統をつぐ下御靈神社の出雲路通次郎宮司によつて盛大な祭典が行われました。

闇齋先生の曾祖父淨榮は播磨の人、祖父母淨泉は山崎生れ豊太閤の正妻北政所の兄姫路城主家定に仕えた。家定の長子勝俊は山崎と龍野の城主であった。その弟利房は山崎城主から関ヶ原の敗戦後備中足守に転封された。闇齋の父淨因は家定

京都の下御靈神社の中に垂加社と称して闇齋先生の学問について東大教授阿部吉雄先生の記念講演をお願いした。

尚山崎町宝となつてゐる闇齋木像は吉川先生筆の奉獻の碑が闇齋神社境内に建ててある。次で昭和四十四年、

先生誕三五〇年祭を執行し、京都女子短大学長出雲路敬和先生の記念講演と遺墨その他展覧会を開いた。本年は丁度三〇〇年祭に当りますので、記念講演会、詩吟大会等を計画しております。



山崎町では昭和三十七年二八〇年祭を行いました。

打ち込め雛鳥

高野 圭介

みたのです。

子どもは未来からの使者であります。

ふるさと山崎の声援を担つて、いずれ、

万丈の気を吐くであろう雛鳥が数多く蟠

まっているのです。

今や天の時、年初来子どもも開基教室が

開講されたのです。なにとぞ、この打ち

込む雛鳥に万雷の御声援を賜りたく存じ

ます。

ここに、少年の譜を贈ります。

二柄と、鳳声あまねく光被されるに至つ

ております。

開基の何ものが、ふるさとの人の心を

あやしく、とりこにしてしまうのでしょうか。

開基活動の実態をみますに、中華民

国においては全国体育総会に属しております。

日本の日本棋院・関西棋院は共に文化庁

教育委員会に、そして山崎町では文化連

盟に活動の基盤を置いているのが現状な

のです。

恒例の事業は、初夏のさつき碁会と秋

の菊碁会ですが、このたび新しく一つの

事業が加わりました。

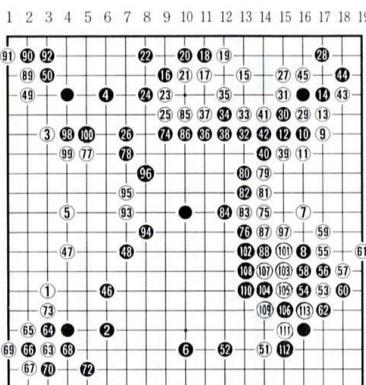
折しも、昨年夏、東大阪子ども開基教

室一行を迎えて船越のり寺にて子ども

開基教室を催しました。続いて、山崎チ

ルドピア'81に「白と黒の石のとりっこ」

を開講し、六十名余りの子どもの参加を



(1) つぐ
一一三手完 白中押勝

関西棋院 実業支部長

秋の音楽祭

運営委員 尾崎正明

ります。現在では他町からの賛助出演も得て、地域的な輪の広がりを見ることが出来るようになりました。

より多くの団体が参加することが出来、練り上げられた作品が毎年聴くことが出来る

ことを祈るとともに、お互いにそれがこの山崎町にも、一日も早く出来るこ

とを希望するとともに、お互いにそれに向つて努力してゆきたいと思います。

秋の音楽祭は、今年で五回目を迎えますが、洋楽のアンサンブルを楽しむものにとって年に一度の大いなイベントとして定着してまいりました。この音楽祭では、これまでに合唱、プラス、リコーダー、アコースティックギター、クラシックギターなどのアンサンブル、重唱、電子オルガン演奏など、さまざまな音楽の響きが深まる秋の一日を満たしてくれました。そして、すべての演奏を持ち寄つて会いましょうと、大合唱で音楽祭の幕を閉じるのです。

もともと秋の実会という音楽団体が毎年秋に行つておりました。"アンサンブルの集い"において、地域の音楽グループが一同に会して心暖まるコンサートを開いておりました。それが文化連盟、教育委員会のお世話により、ひと回り大きくなつて山崎町全体の洋楽の音楽祭に発展してまいりました。主催は、各団体の代表者で構成されるアンサンブルハウスという団体で、主体性を持って運営してお



美術協会を創られた人々

小川 登

美術展が開かれて、昨年で第十七回を数えました。私は五代目の会長のようですが、初代会長は小林善太郎翁であります。翁は日本画の名手で、楠風閣に素晴らしい鶴の画を書いておられます。人世の達人で、私等も随分處世上のお訓えを頂戴致しました。

二代目が本條猛二社長であります。東京から九州までの営業路線を持つ、大山陽自動車運送KKの創立者であり、美術に対する御造詣が深く、書を能くされたと聞いています。又、河



本後援会の会長でもあり、私を政治の道へ誘つて下さった方の一人であります。三代目は友沢博士で、名医であり、陶芸家で私も立派な作品を頂戴致しています。詩吟では賀堂流師範で私の大先輩です。私が美術協会の会長を仰せつかつたのも、友沢先生のご推挙によるものと聞いています。四代目は教育者で町會議員、伊藤画廊のオーナー伊藤親保先生です。先生の御一家は芸能、芸術一家の聞え高いお家です。伊藤先生には篠乃丸吟詠会の事務局長、奉公袋の会事務局長等々、私が

何時も扶けて頂いております。美術協会はこのように、美術に対する深い理解と、高い見識、優れた技能をお持ちの、大先輩の御指導の下に創られたものであり、数々の輝しい実績を残してこられました。私のような俗物で果して此の大役が務まるであろうかと、危惧致しております。幸にも協会には、経験者で、美術に対する高い見識と、限り無い情熱をお持ちの、スタッフが揃っています。皆様の御協力によつて、山崎美術協会が益々発展致しますよう、希うものであります。

漢詩と日本精神

小川 賀尉



日本人の精神文化は、日本古来の文化に、漢学、佛教が加わつて渾然一体をなし、獨得の日本精神を構成したと考えられるのであります。其の構成課程に於て、漢詩が大きな役割を果たしているのです。

我が国が律令国家として、形体を整えられたのは、大化の改新であります。それを実行された天智天皇の御聖徳を讃えて、皇子孝文天皇がお作りになつた漢詩「待宴」が、吾が国最古の名賦とされていま

す。日本の精神文化の退廃が嘆かれる今日、朗吟が盛になり、先哲の名賦が吟じられていることは、極めて意義深いこと

足跡を残された弘法大師には、大師ならではの名作「三宝鳥」があります。学問の神様であり、偉大な政治家であった菅原道真公には「九月十日」を始め、数々の名作があります。建武の中興は、英邁な後醍醐天皇が、朝廷に於て朱子学を講ぜられ、日野資朝、北畠親房、藤原藤房等の指導精神の根源をなしたものであります。大楠公の旗印「非理法權天」、児島高徳が桜樹に刻んだ「十字之詩」等、吾々の胸に鮮烈な印象を与える名賦であります。当町に所縁の深い山鹿闇齋先生も、国学者であると共に漢詩の名手です。明治維新の原動力となつた義公、烈公も明詩人であります。頬山陽、藤田東穂義士の壯舉をなさしめたものであります。中朝事実を著した山鹿素行の哲学が、赤穂義士の壯舉をなさしめたものであります。当町に所縁の深い山鹿闇齋先生も、国学者であると共に漢詩の名手です。明治維新の原動力となつた義公、烈公も明詩人であります。頬山陽、藤田東

理 事	副 会 長
伊秦 小庄 三青 根猪 藤福 野 川 宅柳 岸尾 村岡 操耕 和宏 又元 健省 久 二三 登夫 生次 彦一 三藏	壺伊 和前 庄 阪藤 田野 親秀 四郎 静 寿保 男郎 夫

五十六年度 山崎町文化 連盟役員

事務局	監事	理事
伊藤長福 藤川山清 次耕圭一郎 重井正介 兵衛	入江高野 江静圭 明一 重慧 兵連	藤尾崎 井正信 菅原信 前田明 安治昌 田浩夫 連三



ここに山崎町文化連盟機関紙「やまさき文化」創刊号を世に送ることとなりました。事茲に至るまでに、色々と紹余曲折はありましたが、ここまで運んだのは連盟の会員並びに各役員、就中その推進力となられた伊藤副会長等のご尽力のたまものです。

ご一読戴いて色々とご感想はあるうと思いますが、編集委員一同は何回も寄り会つて相談し、侃侃諤諤の討論を重ねたものです。何しろこんな種類の刊行物については、誰も初めての経験であった関係上、暗中模索の連続でした。中でも、その内容密度については一番議論のあつた処でした。同種類の各文化出版物を参考にもして、編集方針を決めた次第です。

それは出来るだけ文芸性を中心にして、各部の紹介や記録を織り交ぜ、カットや写真を多く取り入れ、読み易く見やすい紙面をと心がけたのですが。第一に予算が限られているのに無理をし、他紙に見劣りしないものをと懸張ったものですから、とうとう広告料などで有志のご援

助を乞う始末となりました。しかしこれも創刊号のことですし、編集委員の熱意のあまり、勇み足とでもご理解下さいませ。

いずれにせよ山崎に初めて現れた、文化的ジャーナルともいふべき異色の刊行物ですから、将来立派に守り育てて、ユニークな紙面に仕上げてゆきたいものと念願しています。

最後に、ご依頼に応じてご多忙の中、玉稿をお寄せ戴いた執筆者各位並びに表紙の題字を揮毫して下さった尾崎教育長と、多数のカットをお寄せいただいた福岡先生に深甚の謝意を捧げますと共に、煩瑣な編集庶務に尽して下さった教委の伊藤氏に、心からお礼を申し上げ、今後大方のご批評、ご叱正に俟ちたいと存じます。

◆編集委員

浅田耕三
藤村泰三

荒木俊介
根岸元彦

北川智恵
藤村清一

（根岸記）

編集後記



たしかな技術で世界をむすび
NEC

兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地 ☎ 播磨山崎 (07906) 2-1222(代)

登録商標

SANYO-HAI

山
孟陽

高
級
清
酒

名
聲
轟
四
海

兵庫県山崎町山崎
山陽孟酒造有限会社

登録商標

老松

スエヒロ
オイマツ

兵庫県
山崎町
老松酒造

兵庫県山崎町 老松酒造有限会社

地元にひろがる

心のふれあい

にしん



西兵庫信用金庫

理 事 長 杉 元 清 美